

# 未来に生きる赤須賀

赤須賀漁業協同組合

止まれ



# 未来に生きる赤須賀

# 目次

漁師町「あかすか」みらい 照古輝今

赤須賀漁業協同組合 代表理事組合長 秋田清音

4

## 赤須賀のすがた

Photo

8

赤須賀のこと

14

干潟のこと

16

木曾三川の恵みのもとで 秋田清音

18

町のあゆみ 杉本竜(桑名市博物館)

22

空撮写真で見る赤須賀の移り変わり

32

## 赤須賀のなりわい

Photo

36

赤須賀の漁業 平賀大蔵(海の博物館)

44

貝を叩やそう

54

座談会・漁業を支えて 漁協女性部

58

交流事業から芽生えたかけがえのない絆 水谷隆行

62

奮い立たせる岩となれ 内藤廣(内藤廣建築設計事務所)

66

地域の皆さまとともに JFマリンバンクみえ桑名出張所

68

## 赤須賀のこころ

Photo

70

まつりと信仰 大河内浩

78

赤須賀むかしはなしあれこれ

84

座談会・赤須賀のむかしがたり 佐藤豊晴・伊藤武敏

88

赤須賀船のこと 平賀大蔵(海の博物館)

92

自然災害とのたたかい

98

長い治水の歴史と環境保全 木曾川下流河川事務所

104

座談会・赤須賀の明日を拓く 漁協青年部

112

発刊に寄せて 水谷元(桑名市長)

118

赤須賀の奇跡 石原義剛(海の博物館館長)

119





# 赤須賀のこと

## 未来に生きる赤須賀

「桑名の夜は暗かつた  
蛙がコロコロ泣いていた  
焼鮎貝の桑名とは、  
此処のことだと思つたから  
駅長さんに尋ねたら  
さうだと云つて笑つてた…」

詩人・中原中也の「桑名の駅」にも詠まれ、全国一の漁獲を誇つたハマグリも絶滅の危機に追い込まれましたが、さまざまな開発の狭間にあるこの地に、漁業専門の集団が今も残っていることは奇跡的なことでもあります。

現在、赤須賀はシシミ、ハマグリ、アサリを対象とした採貝漁業やシラウオ漁、ノリ養殖業がおもな漁業となっています。

昭和五五年頃より漁業組合で協議を重ね、以前より行なわれてきた貝類の資源管理をより強く推し進める漁業管理計画を打ち立て、全国に例を見ない、出漁週三日制や一俵あたりの漁獲最上限を定めるなどの取組を行なってきました。

また、ハマグリ資源の復活を

めざして、昭和五〇年代より陸上施設におけるハマグリ種苗生産技術の開発に着手し、現在では毎年、生産稚貝を干潟へ放流しており、近年ではハマグリ資源の復活の兆しがみられつつあります。

古来より木曾三川の恵みを種として、先祖より受け継がれてきた赤須賀の漁業を次の世代へ残すための取組は、赤須賀に生きるものの使命であると考えています。

伊勢湾最奥に位置する名古屋経済圏の発展の際で、赤須賀だけでなく伊勢湾の漁業は急激に衰退していきました。多くの人たちの命と財産を守るための河川の改修工事が、私たち漁民の命と財産を脅かすことになったのも皮肉な結果であります。しかし、さまざまな歴史を乗り越え、先人の知恵を受け継ぎ、現在の赤須賀の姿があります。

赤須賀の元気と取組を多くの方に知っていただくことで、自然とともに生きてきた知恵と心意気がいつまでも伝わっていくことを願っています。



# 干潟のこと

潮の満ち引きによって、周期的に現れる海陸地形のことを干潟といいます。

干潟には河川や海から運ばれてきた有機物がたまりやすく、有機物はバクテリアやそこに棲む生き物によって分解され、環境の潤滑が保たれてきました。

しかし、さまざまな命を育み、海の浄化に役割を果たしてきた干潟が、富栄養化や埋立て、護岸工事などの影響によって、消滅したり、その役割を果たせなくなっています。

赤須賀の漁業を育んできたのも、木曾三川下流の干潟のおかげでした。

## 赤須賀の漁場

干潟は、潮干狩りの場として身近な自然ではありますが、そもそも干潟や藻場は、多くの水生生物の生活を支え、魚介類の産卵や幼稚仔魚に成育の場を提供するとともに、水中の有機物を分解し、栄養塩類や炭酸ガスを吸収し酸素を供給するなど、海水の浄化に大きな役割を果たしています。

赤須賀の漁業者が漁場としてきた木曾三川河口域には、かつては広大な干潟や藻場が存在し、ひばり山や大河原、新田下、町屋下など漁場の名称が付けられておりました。その漁場は豊富な魚介類の生息場となつて、タイやカレイ、ウナギ、シラウオ、ハマグリ、カキ、エビ、カニなど多くの魚種が漁獲されてきました。

しかし、近年の経済発展に伴います沿岸開発や大規模な干拓事業等によりまして、河口域の干潟や藻場は急激に減少してきました。干拓事業としては、昭和二一年に城南干拓事業が着手され昭和三二年度に完成しており、また、木曾川干拓は国の直轄事業として昭和四一年から開始され、昭和四九年には造達が完了されました。

併せて、昭和三四年の伊勢湾台風の被災以降に濃尾平野の地盤沈下が進行

し、長島町地内で一六〇cmも沈下した地点があり、同時に河口域での沈下も進み干潟や藻場等が激減しました。

## 干潟の消滅と漁業への影響

このような漁場環境の変化により、ハマグリなどの魚介類の生息場が失われ、漁獲量の減少につながってきました。特に桑名名産のハマグリは、昭和四〇年代に二〇〇〇トン、三〇〇〇トンの漁獲量がありましたが、昭和五〇年代以降急激に減少し、一時一トンを割るまで落ち込み、絶滅の危機さえも叫ばれるようになりました。

そして、この漁場の変化やタム、堰等の建設による河川環境の変化は、漁獲量の減少とともに漁業者自身が漁獲規制の強化を行なうなど、少なからず操業形態への影響を及ぼしてきました。

平成五年、六年には、長島川河口堰建設に伴って出た浚渫土砂を利用して、四〇haの人工干潟が城南沖と長島沖に造成されました。これは、干潟の持つ多様な機能を復活させるよう、ハマグリなどの生息地の確保はもとより、ここに生息する二枚貝等による水質浄化を期待して造成されたものであります。

また、平成六年以降には、木曾三川河口部にシジミ等の底生生物の生息場所となるような干潟を再生する清プランや、ヨシ原の再生といった自然再生事業が実施されました。

人工干潟の造成と、過去三〇年間にわたるハマグリ種苗生産事業や稚貝放流事業等の地道な取り組みにより、最近ハマグリなどの貝類の漁獲量が徐々に増大しており、名産ハマグリ復活の兆しがみえてきたところです。

## 干潟に関心を持つ

毎年、ハマグリ稚貝の放流は、人工干潟において漁業者や小学生、漁業関係者らによって実施されており、また、山側である岐阜県の小中学生を招待して、地元の小中学生とともに干潟で生息する生物の観察会を行い、干潟が持つ機能や役割を理解してもらうことにより、漁業への意識の高揚を図っています。

干潟が持つ多面的な機能を維持していくためには、漁業者自身が干潟等の生態系を保全していく活動に取り組んでいくことが重要であり、現在漁協が実践している放流事業や漁業交流事業、清掃活動などを継続することや、採貝の底引き網漁の操業で、海底を耕運することが自然と漁場を維持していくことになり、生産活動自体が干潟など漁場の保全につながっているところでもあります。

公益的な機能や効果を発揮する干潟等は、市民共有の財産であり、食糧供給の生産場である貴重な漁場として、地域全体で守り維持していくということが必要であります。そのためには、漁業者が率先して干潟等の保全活動に取り組んでいくとともに、地域の方が参加できる場を提供して漁業への理解を得ていくことが、漁場の保全においては自然環境の保全につながるものと考えられます。

